

山城守長知の舊第にて、廣坂高本多氏邸地の向なり。此の地後に學校の地と成りたり。故に今學校の地ともいへるなり。元和五年に波着寺今之地へ移轉を命ぜられ、其の後に至り横山氏の第地と成るものにして、六年十二月、城中火災の際利常卿の假居所とし給へる横山氏邸は、尙城内新丸に在りたるなり。

#### ○横山山城守舊第

此の地は、本多氏邸地の向ひにて、今金澤神社及び長谷川氏の邸地是なり。延寶の金澤圖に、今云ふ廣坂の高東北の側は横山左衛門と記し、西南の側は本多安房と記載す。横山氏第地前通り百十七間三尺、奥行廣坂の方四十一間、金澤神社の方四十九間三尺とあり。按するに、元祖山城守長知は初め城内に居第あり。慶長の頃は、三丸に居住、後新丸に移居す。故に横山氏を新丸家と呼びたるよし、有澤武貞の金澤細見圖譜に見たり。故に元和六年本丸殿閣火災の時、新丸の第宅を利常卿の假居所となし、横山氏は下邸へ退去ありし事、三壇記等に見ゆ。此の後本多安房第地の向ひなる地を賜ひ、二代左衛門忠次・三代山城守任風まで、此

の地に居住し、元祿九年九月轉地を命ぜられ、翌年田町の下第へ退去し、其の後九十五年空閑の地と成り居たるを、寛政三年此の地に學校を建てられ、文政五年竹澤殿造營に付き、學校を廣坂下へ移し、竹澤の園内と成したるを、明治五年金澤神社の境界を立て、餘地は拂下げに成りたり。

#### ○横山山城守長知傳

横山氏は本姓小野。孝昭天皇の皇胤小野妹子近江國滋賀郡小野村に居住し、小野を氏とすと、姓氏錄に見り、其の後胤同國伊香郡横山村に住居し、横山を稱號とす。武家混血集に云ふ。横山山城守先祖は小野氏にて、墓の後胤義隆は、生國美濃にて齋藤氏に仕へたり。父半記長隆は、初代初めて横山と號す。といへり。山城守長知が祖父將監時隆は、生國美濃にて齋藤氏に仕へたり。父半記長隆は、初め金森五郎八に仕へ、天正十年越前府中に於て父子共に前田家へ召出され、利長卿に奉仕し、翌十一年四月江州柳ヶ瀬合戦に旗奉行を命ぜられ戰死す。長隆數子あり。長男長秀右京と稱す。十五歳にて利長卿の子小姓と成り、能登末森以來所々の合戦に戰功を顯し、度々加恩ありて一万石賜はり、慶長五年大聖寺城責の後、二千石加秩せられ、同七

年五月命に依つて太田但馬守を城中に於て殺害し、其の賞として但馬が家祿一萬五千石を合せ賜はり、二萬七千石を領し、利長卿越中國へ隠居し給ふ時、養老附と成り、富山・高岡にて奉仕せし處、慶長十九年利長卿薨逝以前、故ありて流浪の身となり、父子共退去して江州に至り、坂本に寓居し、剃髪して名を夕庵と改稱し、後二子を坂本に留め、其の身は敘山に隠居して名を道哲と改稱すといへり。傳説に云ふ。此の頃殊の外困窮しけるが、或夜の夢に、左の手に燭を乗り、右の手に玉を握り行けるに、倒れて燭もきえ玉も破れたりと見え、甚だ憂色しけるを、傍に人有りて、是は吉夢なりとて即座に狂歌をよめり。

今迄のとぼしきことを打捨て

君より祿を賜はりにけり

然るに其の年の冬、大坂出軍の事起り、利常卿越前浅生津に宿陣し給ふ處、同所へ召され、復仕の命を蒙り、家祿元の如く賜はり、金澤留守居を命ぜられ、二子は直に大坂へ從軍を命ぜられ、翌元和元年夏陣には、殊に先鋒へ加へられて戰功を顯せり。同年閏六月利常卿上洛、宰相に昇進し

給ひ、本多政重と兩人叙爵し、山城守を拜任し、三千石加恩ありて、三萬石をば世々家領とす。本多政重と兩人大老を勤め、執政の隨一たり。正保二年致仕し、翌三年正月廿一日卒す。享年七十九歳なり。湯淺元禎の常山紀談に云ふ。横山山城守長知は、利家の臣也。初め浪人にて敘山に寄宿し、諸國を武者修行して後、前田家に仕へ大膳と云ふ。加州大聖寺・小松・越中末森などの軍に武功有りて一万五千石を領し、其の後太田但馬守を命に依つて討ち取り、太田が祿一萬五千石を合せて三萬石與へらる。小瀬甫庵は、町醫にて加州金澤に居り、長知の許に心安く常に來て毎夜伽したり。長知は尾州の人にて、織田家の事能く覚えたりしゆゑに、信長の事を甫庵毎夜尋ね問ひ、且秀吉の事をも問ひけるゆゑに、長知或は委しく或はおろく語り聞かせけるを、甫庵退きて書き記し、信長記・太閤記二部の書を著し世上へ出しけるを、長知聞いて、信長・太閤の事を書き記さんために尋ね問ひたらんには、答へんやうの有るべきに、遺漏も多く残り多き事也。其の事を聊かも知らせざるに依つて、只一座の物語に云ひ聞かせたるを、其の儘に書